

「4月21日」の神話性

鈴木 茂（東京外国語大学教授）

ブラジルでは4月21日は祝日である。ブラジルの音楽家ラマルティン・バボのヒット曲「ブラジルの歴史」（1934年）には、「4月21日、カーニバルの2カ月後、カブラル様がブラジルを発明した」とあるが、「ブラジル発見」の祝日ではない。少しでもブラジルの歴史を学んだことのある人なら馴染みの深い、ティラデンテス（ジョアキン・ジョゼ・ダ・シルヴァ・シャヴィエル）の命日である。9月7日の「独立記念日」、11月15日の「共和国宣言記念日」と並ぶ、ブラジル国家の成立に関連する重要な記念日である。

ブラジルの公式の歴史においてこの人物がいかに重要であるかは、1986年9月7日に首都ブラジリアの三権広場に開館した「祖国英雄堂」に最初に祀られた人物であることからもうかがえる。祖国英雄堂の正面玄関にも彼の彫像が飾られているほどである。ちなみに、1822年9月7日に「独立か死か」と叫んでブラジル独立を宣言したとされる初代皇帝ペドロ一世が祀られるのは1999年のことで、奴隷制度に抵抗した17世紀の黒人指導者「パルマーレスのズンビ」と初代共和国大統領デオドロ・ダ・フォンセッカに次いで4番目であった。

ティラデンテスは現在のミナスジェライス州に生まれた。貧しい幼年時代を送り、長じて下級軍人となった。歯科医見習いを経験したことからこの渾名（「歯抜き医者」の意）で呼ばれた。18世紀、ミナスは金の採掘で繁栄したが、やがて産出量の減少に見舞われ、ポルトガル王室は収入減を課税強化で埋め合わせようとした。これに現地の支配層は不満を抱き、「共和政府」の樹立を企てる。参加者の多くはヨーロッパへの留学経験をもち、共和主義に共鳴していた。計画は密告によってあえなく発覚し、1789年5月、首謀者11人が逮捕され、リオで裁判にかけられた。3年後、全員に死刑が言い渡されたが、国王の命令で10人は終身流罪に減刑され、実際に処刑されたのは最も身分の低いティラデンテスだけであった。

この事件はふつう「ミナスの陰謀」と呼ばれ、教科書的には未完の独立運動として知られている。しかし、実際のブラジル独立とは直接的な関係はない。ブラジルはポルトガルの皇太子を元首とする君主国として独立したからである。それなのに何故、独立の立役者を差し置いて、ティラデンテスは「祖国の英雄」の筆頭に据えられているのだろうか。

実は、ティラデンテスの名には、独立後、長く否定的なイメージがつきまどっていた。評価が高まるのは19世紀後半の共和主義運動の中であり、1889年11月15日の「共和革命」後に「独立の殉教者」という人物像が定着した。興味深いことに、彼の肖像は十字架にかけられたキリストに似ている。囚人として髪を短く刈られヒゲも剃られたはずであるのに、肖像の髪は肩までかかり、顎にはたっぷりヒゲを蓄えている。たとえば、現在は世界遺産となったミナスのかつての主都オーロプレトの中心広場にある記念碑の頂上には、そうした立像が鎮座している。台座には1892年4月21日建立とある。

「4月21日」の神話性は、毎年祝日に加え、1960年のブラジリア遷都の日当てられるなど、共和政の正当化と国民統合の推進のために利用されてきた。さらに、1985年には、だれも想像できなかった歴史の偶然が起こった。民政移管後の最初の大統領に就任が予定されながら病床にあったタンクレード・ネヴェスが、4月21日、死去したのである。彼もまたミナスジェライス州の出身であり、「自由の殉教者」となった。

ところで、今年はブラジル移民船「笠戸丸」のサントス入港から百年目に当たっている。昨年（2007年）4月21日、1人の戦後移民が亡くなった。享年66歳、ブラジル渡航45年目であった。その人の名は高野泰久という。多くの人々に親しまれたサンパウロの高野書店の創業者である。単なる偶然の一致にすぎないとはいえ、「4月21日」が近づくと、そうとも言い切れない気持ちが湧いてくる。